

12. 大生神社、大生神社古墳群

(1) 大生神社の創建とその経緯

神社境内には大生古墳群がこの神社を囲むように残っていて、オフ一族の奥津城（墓）とされています。当社の創建時代には大別して次の二説があります。

①「当社棟礼の由緒書」

(1)太古から当地に鎮座 (2)神護景雲元年（767年）大和国春日遷幸（鹿島神勸請による春日大社創建） (3)大同元年（806年）2月11日当地に遷還

(4)大同2年（807年）鹿島に遷幸跡地（大生）に分霊を奉斎

②「東家（鹿島神宮社家）文書」(1)大同元年（806年）11月14日、多神社から遷座し創建

以上の事から春日社の創建に関して鹿島神宮が社格を変えその変化に当社が関与したとみられています。

一方、国史・神名帳の文献には当社に関する記載はありません。鹿島神宮が発展するに伴い、当社鎮座地は神宮に包括されて末社となり、当社の祭礼には神宮から物忌（後述図4 東家蔵物忌乗輿参照）が出興したと伝えられています。

中世には豪族、大生氏からの崇敬を受けました。大生氏は後に没落しましたが江戸幕府からは祭田・山林の支配を許されました。明治に入り近代社格制度において郷社に列した本殿は安土桃山時代の天正18年（1590年）の造営であり三間社流造で間口6m、奥行7mで地方社殿としては大きく、また当地方では最古の社殿建造物であり、拝殿と斎殿と共に茨城県の文化財に指定されています。

神社境内には多くの巨木が育成していて昼でも薄暗く湿地性樹林の特徴を示す300余種の植物からなる樹林を形成しています。樹林は極相林の状態にあって生態学的にも貴重であるものとして県の天然記念物に指定されています。



図1 大生神社本殿



図2 神社参道周りの樹林

(2) 大生神社例大祭

東家（鹿島神宮）の文書では大同元年（806年）11月14日に勅によって大生の神を奉斎したので11月14日から16日を例祭にしている、現在もこの期間内の15日に行われています。また古くから鹿島神宮の物忌（神宮の斎宮）がこの祭りに出興したとされ物忌が鹿島神宮の境内を出て祭祀するのは年6回中、大生神社の祭礼だけであり当社に対する特別待遇であった事が分かります。

物忌の出興は次の年6回で、その内の11月15日が大生神社の宮祭りです。

- | | | | |
|-----------|------|-----------|------|
| (1)正月7日夜 | 本宮祭 | (2)4月11日夜 | 奥宮祭 |
| (3)5月5日 | 流鏑馬祭 | (4)7月10日夜 | 大宮祭 |
| (5)7月11日夜 | 将軍祭り | (6)11月15日 | 大生宮祭 |

祭りでは祭儀が古式に則って行われた後、特殊神事の巫女舞神事が奉納される。巫女は氏子中の7歳から13歳迄の少女から籤引きで決めます。これは11月1日夜、氏子総代が籤を引いて決め、同家に気づかれぬように七五三縄（しめなわ）を張ります。

舞の所作は先輩が教えます。巫女の衣服は洗衣に緋袴、垂髪とし右手に幣、左手に鈴を執ります。祭儀は当日夕刻時から始まり、まず通例の大祭によって修祓献選饌祝詞奏上（榊行事の儀、塩行事、米行事、奉幣行事）があり開扉祝詞奉上、次いで古式豊かな巫女舞が奉納されます。楽人は7人囃子（笛2、小鼓1、大かわ1、大太鼓1、小太鼓1、神楽太鼓1）です。巫女は神前に向かって幣と鈴を上下する事しばし、終わって舞に移りますが舞は簡単な所作で後退3回、1進2回を繰り返して一連の所作が終わりとなり、再び同様な所作を行い2回目は神前を1周して終わります。この舞を5座又は7座にて約40分程度で終わる簡単なもので、終わり次第一同八枚手を行い閉扉となります。この間2時間くらいです。古い儀式を残すものとして県の無形文化財に指定されています。



図3 巫女舞の様子

(3) 物忌乗輿

大生宮祭りには鹿島神宮より物忌の乗輿が当社の庭に据えられ祀り数人と共に祭儀を執行します。図4は最後に据えられた乗輿で総檜板造り、屋根は切妻造りの妻入りとし身は長方形で幅二尺九寸（約88cm）奥行三尺八寸五分（約117cm）正面破風並びに四方左右に刻と金具を施し七五三縄を張り入口に暖簾を垂らします。彫刻は破風鳳凰、正面四隅に丸左藤花文を、左右には牡丹と菖蒲を施し金具は金銅で巴文を刻みます。尚、白木の轆（ながえ）を附し前後に之を受ける呉床一対が附属されます。



図4 東家蔵物忌乗輿

(4) 大生古墳群とは

北浦西岸の大生原台地上にある古墳群で、前方後円墳・円墳・方墳など110余基の古墳からなり、茨城県では最大規模を誇ります。築造時期は古墳時代中期（5世紀）とみられ、古墳群は大生神社を中心として大生西部古墳群、大生東部古墳群、カメ森古墳群、田ノ森古墳群に大別されます。このうち大生西部古墳群は代表的な鹿見塚古墳（図5 県指定史跡）をはじめとして子子舞塚古墳（まごまいづか＝孫舞塚古墳）、天神塚古墳、白幡八幡塚古墳、など37基の古墳からなり、その面積は8.8ヘクタールに及んでいます。



図5 鹿見塚古墳（1号古墳）

(5) 大生西部古墳群の分布

古墳の基数は大生東部が60基(内前方後円墳2基)に対し西部の37基(内前方後円墳5基)で、大生西部が23基少ないが前方後円墳は5基と西部が最も多い。盟主的古墳である子子舞塚古墳(全長71.5m)は発掘調査がなされており、埴輪や多くの副葬品が発見され、7世紀頃のものとして推定されています。

これらの古墳群の被葬者は鹿島神宮と密接な関係があったオフ氏(多氏・飯富氏)一族と見られています。また古墳群の中央に位置する大生神社は、この一族の奉斎する社とされ、各前方後円墳がいずれも大生神社又は鹿島神宮を向いている指摘もあり、大生神社社伝も含め鹿島神宮とオフ氏の関係について論議がなされています。

110余基の内、前方後円墳9基はほぼ確実に前方後円墳は図6の大生西部古墳群分布図で分かるように、3号墳を除けば大体70m前後の大形です。更に1、2号墳は古墳方部に出っ張りのある造出部を持った特徴ある形状です。造出部は幅16m、奥行12m、高さ3m程度の規模でその内部は礫で仕切られた二層からなっています。ここからは多くの埴輪や大甕、土器、更に14号墳の箱式石棺からは男女2体の人骨が発見されています。

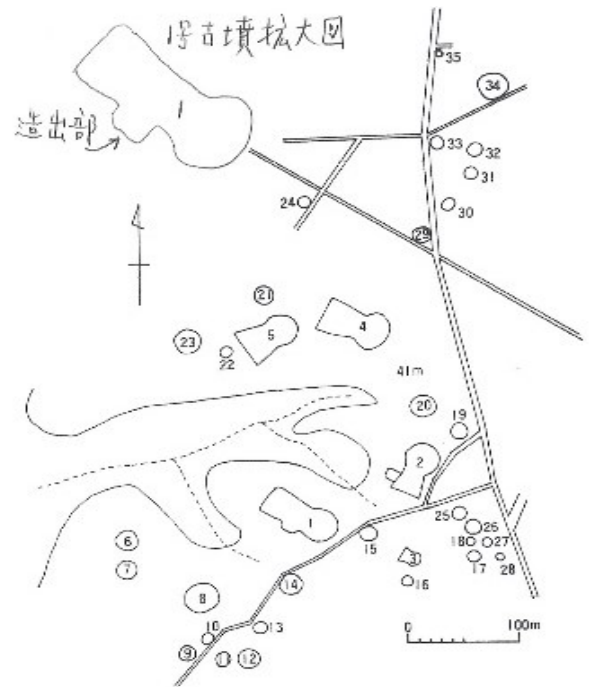


図6 大生西部古墳群分布図

(6) 箱式石棺の人骨

大生西部古墳の発掘は昭和27年9月より35年7月にかけて国学院大学の大場磐雄教授を中心に実施され、人骨の発見は西部1号墳と西部14号墳の箱式石棺から発見されました。

【西部1号古墳人骨(図7)】・・・ 熟年男性と小児男子の二体と推察され、熟年男性の頭骨はある程度崩壊しているが脊椎・肋骨・骨盤・大腿骨は保存が良い状態です。大腿骨に接するように小児ではないかと推察される頭蓋骨が破片となって存在して、これは熟年男子の埋葬後、ある時間を置き熟年男子の下肢骨等を移動整理する際に、小児の骨を埋葬したのではないかと推察されています。子子舞塚古墳の謂れはこれに因るのでは無いかと思われます。何とか復元された上腕骨の最大長は34cmと推測され骨端は骨幹に比べ大きく且つ頑強である事から男性である事が窺えます。また脊椎骨に変形性関節炎の棘状突起が認められ、多分熟年者(40～50歳)男性骨と推定されます。上腕骨と大腿骨の最大長から人骨測定の独自の式(リー・ピアソン氏の式)にて身長を推定すると約169cmもあり、当時としては大きな男性であったと言えます。

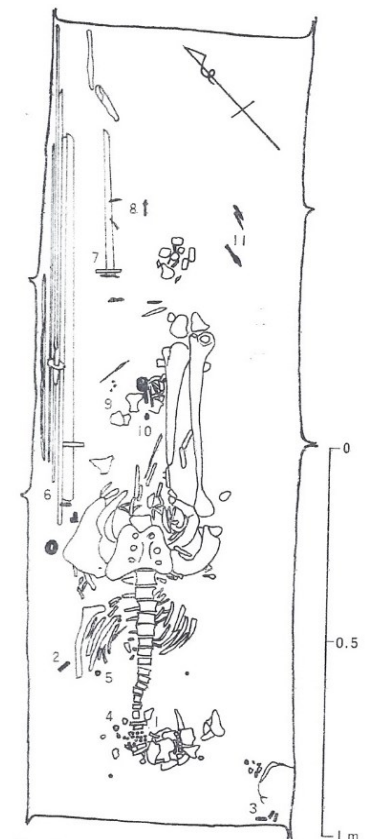


図7 1号古墳石棺内人骨と副葬品→

【箱式石棺】

筑波山麓産出の雲母片岩で構成され蓋と石棺底面はそれぞれ長方形板石型5枚で構成され、棺幅60cm、長さ200cm、深さ70cm、棺の四周は黄白色で20cmの粘土で充填され補強されています。

【造出部】

図7の古墳の造出部は上層・下層の2層の礫から構成され多量の土師器、須恵器、小型壺、玉器類が出土しました。これらの事例は他の2号墳においても鉄器、玉器、副葬品が造出部から同様に出土している事を思えば、明らかにこの造出部が祭祀場所であった事が立証されます。

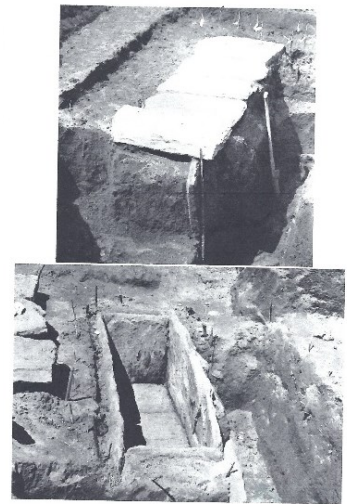


図8 大生西部1号墳の箱式石棺

【西部14号古墳の人骨】

棺内から人骨男女二体が発見されました。図9の左側は青年女子人骨ですが脳頭骨を除いて保存状態は甚だ不良ですが、脳頭骨は膨隆し女性に特有な形質を示しています。頭骨最大長16.5cm、頭幅13cmの中頭型です。全四肢骨は骨格のみ保存され、その上下両関節端は欠如するので、それらの伸長は推測するしかありませんが、推定される大腿骨長は38cm、脛骨長31cmから身長約148cmと推定されています。一方、右側の保存状態も左側同様、良くありませんが男性成年人骨と推定されます。頭骨は顔面頭骨と脳骨底を欠く不完全な傾向があります。後頭部が円錐状に突出する傾向がある事は、本頭骨が本来長頭型に属する事を物語っています。脳頭骨最大長18cm、推定される頭幅13.5cmです。先の女性骨と同様、四肢骨も骨幹だけで上下両端骨を欠如しますが復元される大腿骨長42cm、脛骨33cmである事から身長158cmと推定されます。

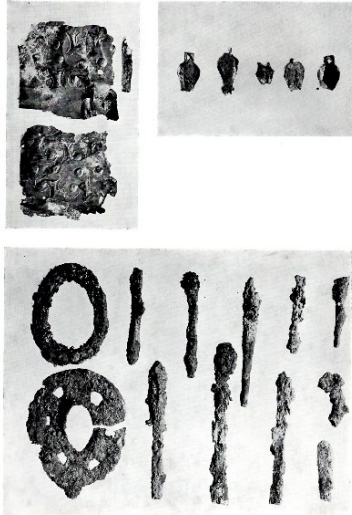
図9の上段は14号古墳の全体像、下段は石棺と人骨です。熟年男子の身長が高い事は、古墳時代の人の身長は縄文時代人や後の歴史時代人に比して大きい事はよく知られた事実であり、この人骨もそれを裏づけています。



図9 14号古墳全体図（上）男女二体人骨（下）

(7) 副葬品、出土品

【1号墳造出部及び石棺内鉄器】



【1号墳埴輪と大甕】



【1号墳造出部土器】

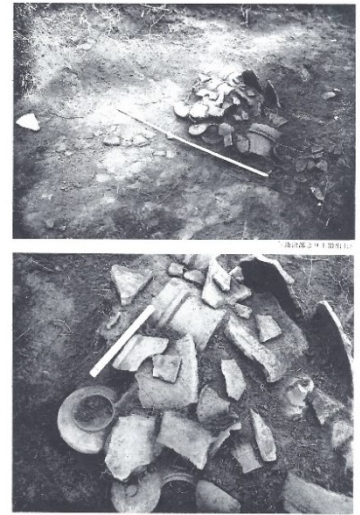


図10 主要出土品

(8) 出土古墳の総括

大生古墳群の調査は昭和27年から同29年迄継続発掘、同35年に遺物調査と第14号墳の発掘と前後5回に亘って行われ、調査日数は80日、延べ人員376人を要し、31万円の費用を費やしました。特記すべきは子子舞塚古墳にみる造出部の組合箱式石棺です。棺外周は粘土で覆われ石棺の蓋石を開けると成人骨一体とすぐ横に並べられた小児一体の人骨の合葬がありました。副葬品も石棺に納められ成人頭部には銀環、銅環、管玉、ガラス、足部には刀子、直刀を認めた。小児骨には頭部に管玉、切手玉等が発見されました。子子舞塚古墳は、オフ氏豪族の誰かの孫が時間をおいて後から埋葬された事が、常陸大生古墳群・茨城県行方郡潮来町教育委員会資料に明確に記されています。